

令和 7 年度 自己診断結果分析報告書（教員・生徒・保護者）

1. 自己診断全体の傾向

本年度の自己診断結果から、本校は教員の高い教育意欲、生徒の良好な友人関係、そして保護者からの厚い信頼という三者の強固な関係性に支えられていることが示された。特に「学校生活の楽しさ」や「実習・体験活動」への満足度が高く、農芸高校としての特色が肯定的に捉えられている。

2. 生徒・保護者・教員の結果

① 生徒の傾向：充実した人間関係と体験重視の姿勢

生徒は学校生活を肯定的に捉えており、特に「人との繋がり」に満足している。

強み：「良き友人に恵まれた（94.0%）」という項目は全指標で最高水準であり、安心できる居場所が確保されている。

学年別傾向：1 年生（学校の楽しさ 92.6%）が最も高く、2 年生（85.1%）でやや低下する。これは中だるみや進路意識の芽生えによる心理的変化と推察される。

学習面：「実習・実験が楽しくためになる（93.6%）」は座学（85.4%）を上回り、本校の特色ある授業が動機付けに直結している。

② 保護者の傾向：学校への高い信頼と学習面への冷静な評価

保護者は学校の教育方針を概ね支持しているが、家庭での様子に基づいた客観的な視点も持っている。

強み：「先生を信頼している（88.0%）」や「学校の教育方針への理解（93.0%）」が高く、学校への協力体制は良好である。

傾向：「子どもが良き友人に恵まれた（88.0%）」と、学校での人間関係に安心感を抱いている。

課題：「授業がわかりやすく楽しいと言っている（72.0%）」については、教員の自己評価（98%）と 26 ポイントもの乖離があり、授業の魅力が家庭に十分伝わっていない、あるいは家庭学習への結びつきが弱い可能性が示唆される。

③ 教員の傾向：高い専門性と教育意欲、組織対応への課題

教員は事故の教育活動に対して非常に高い自負を持って取り組んでいる。

強み：「生徒第一の行動（肯定率 91.8%）」や「教材の工夫（98.0%）」、個に応じた指導（95.9%）など、学習指導への情熱が非常に高い。

傾向：自己研鑽（91.8%）への意識も高く、常に教育力の向上に努めている姿勢が見られる。

課題：一方で「問題行動への組織的対応（67.3%）」や「施設・設備の満足度（38.8%）」は低く、校内体制の整備や環境改善に不安を感じている。

3. 考察

授業評価のギャップ：教員は「工夫している（98%）」と考えているが、保護者が子どもの様子から感じる満足度は 72%に留まる。生徒の実習満足度は高いため、座学における「理解度の定着」を家庭に見える形で示す必要がある。

組織対応：教員が課題としている「組織的対応」に対し、保護者は「学校は安全である」と高く評価している。教員側の負担感や危機意識が保護者には見えていない状態と言える。

4 今後の改善点

授業の見える化：実習だけでなく座学の面白さや成果を、ICT 等も活用して保護者へ発信する。

組織的指導体制の再構築として問題行動への対応について、校内ルールの再徹底と役割分担の明確化を図る。

満足度が一時的に低下する 2 年生に対し、キャリア教育や学校行事を通じた再活性化を行うことなどが考えられる。